

| |
|----------------------|
| トピックス |
| 1. 播州日誌「夏の日々の白昼夢」 |
| 2. 社労士への道 13回「体を張って」 |



福留経営労務管理事務所
 姫路龍馬会
 社会保険労務士・行政書士
 福留章

| | |
|---------------|----------|
| <h1>龍馬通信</h1> | No. 45 |
| | 2021年9月号 |

白露～秋分の候 白く輝く自然

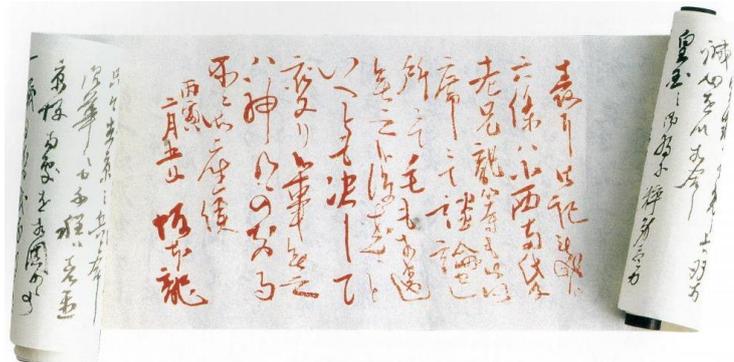
コロナ禍のせいかもしれない。季節を象徴する伝統行事がほとんど中止という自粛の中で季節が足早に過ぎていく。どうしても充実感と言うものが感じられない。8月も20日を過ぎる頃には蝉の声も途絶えて、早秋の虫たちの出番となる。早朝の草の葉におく、露の白く輝いて、秋が忍び足でやってくる。風にそよいでコロコロと葉の上を滑っては落ちる滴の美しさ。それにしても蝉の亡骸が足元に1つ2つ。たいがいは仰向きひっくり返っている。ひと夏のわずか1週間程度の命を精一杯生きて道に転がる空蝉は人生の儚さを感じさせて寂しい思いにもなる。今、生きていることを喜びとして、あらゆる自然の産物に感謝の気持ちを持ち、いちにち1日を大切に生きたいと思う。



- ※白露 9月7日頃
- ※秋分 9月23日頃

随筆 『龍馬と私』 ～ 薩長同盟 ～

慶応2年(1866年)1月20日。もはや限界と言うことで木戸らが帰国の意を薩摩藩に申し出、薩摩も翻意を促すこともなく、送別の宴が開かれ、翌朝には帰国の途につくはずだった。間一髪、龍馬は1月10日に下関を発ち、17日に神戸到着、大阪を經由して19日京都の寺田屋に到着。翌20日、同盟の成立を楽観していた龍馬はその後の様子を見に木戸を訪れたのである。龍馬は大筋で合意されていた内容から、楽観視していたようで自分が仲介人になることすら考えていなかったようだ。土佐の方言で言えば「おまんら、何をしちよったがぜよ。」と驚きの声を発したに違いない。木戸から事態に進展のないことを聞かされた龍馬は西郷に掛け合い、会談の場をセットさせた。事実上、龍馬の薩長同盟における役割はこのことに尽きる。その会談は議論のための場ではなく、あくまでの調印のためのものだった。同盟と言うと攻守同盟を想起するが、実は同盟と言うレベルではなくむしろ「薩長和解」と言ったほうが適切かもしれない。六カ条からなるその内容は要するにどのような場合においても長州藩の「朝敵」の汚名を挽回、解消するために薩摩藩が協力するということだった。禁門の変によって朝敵となり犬猿の仲と言われた両藩を和解させ、それ以前の関係に修復することが目的だったのである。翌21



日、同盟成立。木戸が龍馬に送った6カ条が記された手紙に龍馬は乞われて裏書きをする。「私も同席して決めた内容に毫も相違これなく候」と朱書きしている。この事実からも龍馬が木戸、西郷から絶大なる信頼を得ていたことがわかる。和解に過ぎなかったとはいえ、その後この同盟が大きく維新回転、倒幕に力を与えた事は間違いない。幕府の長州征伐

は将軍家茂の死を理由に撤収され、さらに幕威が低下した。後年、「薩長同盟」が龍馬の功績の1つとして言われているが、龍馬自身はそれほどのことと思っておらず、龍馬の日記(龍馬手帳概要)にも記載がない。龍馬の不思議さがここにもあらわれている。

播州日誌



「夏の日のお昼夢」東京五輪の遺したもの

7月23日開幕した2020東京五輪。205の国と地域そして難民選手団。11,000人のアスリートの参加。「復興五輪」「おもてなし」を掲げて招致に成功。8年の歳月と3兆円の巨費を投じて開催にこぎつけた。難産だった。「呪われた五輪」とまで言われた。準備段階から問題続発。国立競技場建設をめぐるコストの問題、エンブレムの盗作疑惑、女性蔑視発言による組織委員長の交代、開会式制作、演出チーム内での不祥事による辞任解任と開会式の直前まで混乱した。図らずも日本人権意識の低さを世界に印象づけることとなった。東京でのコロナ感染者も不気味な動きを見せ、不安と恐れが入り混じった黒雲におおわれていた。開催の意義についても「復興五輪」の前提は崩れ、「コロナに打ち勝った証」「世界の団結を示す大会」等と変遷した。事実上理念なき開催は、開催中もどんよりとした思い、しこりのようなものがついてまわった。開催そのものが目的化した。ロサンゼルス大会のマリオネットの登場から五輪の政治利用が取り沙汰されたが、まさにその危惧は的中した。その間、五輪開催の是非の議論の中で、招致のために使われた対策費(賄賂)の問題。IOCの金満体質と運営をめぐる傲慢さ、金権にまみれた商業主義、有力スポンサーのエゴなどが浮き彫りになった。五輪は開催地の最適な季節に行われるべきものであり、スポンサーの意向に沿うものではない。真夏の開催はアスリートファーストに反し極端な心身への影響を与えた。一部の選手からのクレームは当然のことである。開催の是非については、国論を二分した。一時は70%に近い反対論が世論調査で明らかになった。

是非論については結局大きな議論にもならずひたすら開催への道を突き進んだ。国民的議論もないままにである。「国民の命と健康を守る」「安全安心な大会にする」何度も聞いた声明。政権浮揚の思惑があったとすれば日本国民を馬鹿にするのもいい加減にと言いたい。開会式でのバッハ会長や組織委員会の橋本委員長の長い長いスピーチは無理矢理五輪の意義を強調するための長さであった。あの時点で私は開会式を最後まで見るのを諦め床についたほどである。



開幕した五輪の17日の期間中、日本列島は連日のメダルラッシュに沸き、困難を乗り越えたアスリートたちがそれぞれの舞台上で躍動し私たちに感動と勇気、希望と力を与えてくれた。喜びの爆発、無念の悲しみへの共感はいくつもの日本国民の心に刻み込まれた。メダルを取った人も、惜しくも入賞にとどまった人もそれ以外の人もそれぞれに輝き、自分自身と母国の名誉と誇りのために死力を尽くした。その姿は皆美しく、五輪が特別であることを教えてくれた。アスリートが全力で挑戦する姿が人権と正義、平和と友好という理想の実現に貢献する可能性を持つから五輪は特別なのである。有力選手が様々な理由で敗者となることも多く見られた。スポーツの世界で「絶対」は無い。いかに有力な選手でも絶頂期に五輪と出会うかどうかはもう「運」と言うしかない。敗北から学ぶことが勝利への道であることを忘れてはならない。メダル獲得は手

段であって目的ではない。努力することでメダリストにもなり得ることが次世代の若者に対するメッセージであり、メダルの持つ意味でもある。金 27 個、銀 14 個、銅 17 個。史上空前のメダル数に私たち日本人は感動の涙を流し続けた。多くの選手たちとそれを支えた大会関係者、ボランティアの人たちの奮闘に賛辞を惜しむものではない。しかし選手達への賛辞と開催の是非は別問題。開催期間中、私たちは 2 つの現実の中にいた。1 つはメダルラッシュ。1 つはコロナの感染拡大。期間中に第 5 波は第 4 波を超えた。

夏の日の白昼夢。私たちは夢を見ていたのだろうか。選手たちの躍動はしばしコロナを忘れさせてくれた。しかし夢ならば覚めない夢は無い。祭りの後の代償は、私たちが受け止めることができないほどの現実。残された負の遺産は想像以上に大きく将来にわたって国民の大きな負担となるだろう。設備の再利用、900 億円に達するチケット代は収入とならず組織委員会の赤字が決定的であり、政府、東京都の負担交渉も難航が予想される。どちらにしても国民に対する増税など国民の負担増が心配される。一方でベラルーシ代表選手の亡命、世界の紛争や格差、圧政の問題に人々の関心が向くきっかけにもなった。五輪憲章の「多様性を認めること」の面でジェンダー（LGBT）の問題への取り組みもあった。競技の中で新しく作られたミックスダブルスの考え方も 1 つの象徴的出来事であった。



閉会後も感染爆発が猛威をふるい全国的にその勢いが広がった。感染爆発と五輪には直接的な因果関係はないと言う。そうだろうか。祝祭ムードが自粛ムードを緩和してしまう事は自明のことだ。それよりも深刻化する医療崩壊の改善に全力を尽くすべきではないか。マイナーな種目が多く採用され、未来の五輪のあり方に一石を投じた。スポーツはもともと「遊び」を意味する。若者たちのスケートボードやクライミング、サーフィン、ゴルフ、ヨット、ソフトボールなど遊びの延長線上にある。フラットな気持ちでこれらの競技を認めることも重要である。今後の五輪について、反省すべき点は、幅広い検証とともに今後を活かし、芽生えた新しい動向を誠実に取り入れ、五輪本来の姿を取り戻さなければならない。困難が予想される未来の五輪を考えると、印象的なシーンが脳裏に蘇る。

スケートボード女子。優勝候補の選手が大技に挑戦し、失敗してメダルを逃した。泣き顔で引き上げてきた選手を多くの外国人が抱擁し最後は肩車をしてその健闘を讃えた。ちっぽけなナショナリズムや肥満状態の五輪の中で爽やかな一陣の風が吹いた。選手に笑顔が戻り喜びの輪が広がった。「友情の金メダル」この無形の金メダルこそ真の金メダルであり、未来の五輪のあるべき姿を示す一条の光であったと思う。



「社労士への道」

第 13 回 「体を張って！！」

開業間もなく人生最大の危機に遭遇。逆境とも言うべき状況の中で、ひたすらに顧客への対応と新規開拓に奔

走した。といってもじゃんじゃんお客様が増えるわけでもなく、人から人への口コミが頼りの開拓であった。心がけた事は頼まれたことに全力で取り組むこと、現場主義で労災発生の場合など必ず現場を見てアドバイスすること。社労士とは関係のない頼まれ事でも誠意を持って他の士業の方を紹介するなどの対応をした。社労士の仕事を超えているなど感じることもあった。多重債務に陥った社員さんの相談に乗ったり、破産手続きのために弁護士事務所に同行したり、あまり深く考えずに会社からの依頼に協力した。

ある日、顧問先の社長からの依頼があり普段から素行の悪い社員の解雇について相談を受けた。社長の言うことを聞かない、社長に対して暴言を吐く、同僚に会社への誹謗中傷を繰り返すなど、もうどうにもならない。それで解雇を言い渡したら「明日の朝、勝負したる。」と言う捨てゼリフを残して早退したと言う。それで明朝何が起こるか分からないので先生に立ち会いをお願いしたいとの事だった。二つ返事で引き受けたものの、ちょっと自信がなかったのも事実。

さて当日、早くから会社につめていたところ、彼がやってきて「解雇できるものならしてみろ。」「訴えてやるからな。」と睨みつけ私の言うことなど聞こうとしない。私がいたことでカンが狂ったようで今日はこのまま帰ると言って、軽トラで出ようとしたとき、私はここが勝負だと思い、車の前輪の前に足を差し込んで「待ってください。問題解決のために話し合いませんか。」「近くの喫茶店でもいいですから。1時間でも。」



「あんたは関係ない。」と言って軽トラを発信。瞬間、どうやら私は足をひかれてしまったようだ。必死の思いが伝わったのか少し経つと態度が変わったところで、近くの喫茶店を指定し、そこで待つように話をした。社長には「解雇手当、2～3ヵ月分、用意しておいてください。」という言葉を残して指定した喫茶店へ。社長との間がこれ程深刻な状況になった以上、会社への復帰は無理、双方が気まずい状態では仕事にならないし精神的にもこたえる。一通り社長の悪口を聞いた後、私はゆっくりと言葉をつないだ。「あなたは若いし、他の職場を考えてみてはどうか。」「解決の方法として解雇手当1ヵ月分をもう1ヵ月分もらえるよう、社長に話をつけるから、自己都合退職と言うことでどうか。」時間はかかったが次第に彼も話を聞いてくれるようになり、「先生を信じて、後はまかせる。」と言うところまで来た。振込先は給与振り込みと同じ口座にと合意した。後は握手をして別れた。解決金2ヵ月分で社長に了解をもらい、退職手続きを済ませた。

もう一件はもっと悪質だった。太子町の建設会社で入社以来勤怠状況も悪く、トレーラーの運転をさせるといつも接触事故起こす。もう使えないので6ヵ月後に解雇すると言う通知を出したとのこと。「1ヵ月程度で良いのですよ。」「6ヵ月と言うのは時間がありすぎてモチベーションも下がるし、他の社員との人間関係もありますから。」と解雇について説明した。

案の定事件が起きた。6ヵ月の期限が満了に近づいた頃、自分で会社の車を持ち出し、指示もしていないのに現場を見に行っていた途中、川の堤防の上で運転は誤り車が横転。自身も負傷した。入院労災を主張し、会社が躊躇している間に事務員さんを巻き込んで自己申告で労災申請をし、事故証明書の存在が決め手になって、労災認定になった。会社としては認められないと言う主張をし、それに私も加担して労基署へ訴えた。労災と言うことで「療養期間中及びその後30日」の解雇制限がかかる。その後一年以上療養期間が続いた。所見がないのに「痛い、痛い。」を繰り返し労務不能の証明をとって労災の給付を取り続けた。

そんな状況の中でたびたび電話がかかってきた。「このたびはえらい何かとお世話になって、体が治ったら挨拶にいかせてもらうわ。砥堀のクリーニング屋の2階やろ、よう知ってるねん。」それが強烈な脅しであることに気づくまで若干時間がかかった。真に迫った脅迫の電話は続き、やむを得ず重要書類を自宅へ持ち帰り不測の事態に備えた。胃がキリキリと痛むようなこともあったがやがて彼の体調が悪化し、立ち直れないような状況になって問題が解決した。嫌な仕事だが年に2～3人はこのような解雇をめぐる仲介の仕事が入ってきた。